

サムエル記上 通 読

8 月



(8 月 30 日)「サムエル記上 17 : 19~25」

彼が兄たちと話しているとき、ガトのペリシテ人で名をゴリアトという戦士が、ペリシテ軍の戦列から現れて、いつもの言葉を叫んだのでダビデはこれを聞いた。

(サムエル記上 17 章 23 節)

- ・ペリシテ軍との戦いに参加している兄たちの元に、ダビデは父エッサイから託された物を持って行きました。そこでダビデの耳に聞こえたのは、ゴリアトの言葉です。イスラエルの兵士は、その言葉を聞いて恐れていました。
- ・40 日もそのような状況が続いたため、王はゴリアトを討ち取ったものに褒美を与えることにしたようです。大金と王女、そして具体的には書かれていませんが何かの特典です。しかしそれでも、ゴリアトに戦いを挑む兵士は現れませんでした。
- ・ダビデの目に、その状況はどのように映ったのでしょうか。彼はサムエルに油を注がれ、主の霊は彼に激しく下っていました (16 : 13)。イスラエルが屈辱にまみれているのを見て、彼はどのような行動を起こすのでしょうか。

(8 月 31 日)「サムエル記上 17 : 26~30」

ダビデは言った。「わたしが、今、何をしたというのですか。話をしているだけではありませんか。」

(サムエル記上 17 章 29 節)

- ・ダビデはゴリアトを見て、「あの無割礼のペリシテ人」と言います。このような表現を今使えばアウトですが、「イスラエルの王」となるダビデの言葉です。彼は怒りに任せてこのように言ったようです。
- ・そしてサウル王が定めた報酬について、周りの兵士たちに確認していきます。ダビデはそのような報酬が欲しかったのか、それともイスラエルの恥辱を取り除きたかったのか、どちらの思いが強かったのでしょうか。
- ・ただこのダビデの会話を聞いて、心穏やかでなかった人物がいました。長兄エリアブです。彼は戦いの厳しさを知っていたのでしょうか。それなのに今まで羊の番をしていた弟ダビデが偉そうに語っている。「何も知らないくせに」、そう思っても不思議ではありません。

(8 月 1 日)「サムエル記上 9 : 21~27」

サウルは答えて言った。「わたしはイスラエルで最も小さな部族ベニヤミンの者ですし、そのベニヤミンでも最小の一族の者です。どんな理由でわたしにそのようなことを言われるのですか。」

(サムエル記上 9 章 21 節)

- ・この 21 節の言葉を見る限り、サウルは大変謙虚です。これから先のサウルの行動を知っている方は、この言葉に少し違和感を覚えるかもしれません。王になる前の彼は、とても「いい人」だったのでしょ。
- ・サウルとサムエルは、共に食事をします。この当時の食事は、とても重要な意味を持ちます。この食事によって、サウルはサムエルと主との交わりの中に加えられたとも考えられるのです。
- ・もうこのときには、行方不明のろばのことはすっかり忘れられています。昨日の箇所で「もう見つかっています」と言われていますが、その言葉をすっかり信じて一晩高台で過ごしたようです。やはりサウルは「いい人」だったようです。

(8月 2日)「サムエル記上 10 : 1～8」

サムエルは油の壺を取り、サウルの頭に油を注ぎ、彼に口づけして、言った。
「主があなたに油を注ぎ、御自分の嗣業の民の指導者とされたのです。」

(サムエル記上 10 章 1 節)

・サムエルは主が命じた通り、サウルの頭に油を注ぎ、イスラエルの民の指導者として聖別します。聖書には「メシア」という言葉が出てきますが、その言葉には「油注がれた者」という意味があります。

・「メシア＝救い主」のようにイスラエルの民を救い、そして支配しなさいという意味がこの油注ぎにはあります。そしてサムエルはサウルに対し、この先起こるであろう出来事を予告します。

・ラケルの墓の脇で二人の男に出会い、ベテルに神を拝みに上る三人の男に出会い、そして聖なる高台から下って来る預言者の一団に出会う。サウルはそれらの出来事を通して、自分が置かれた状況に気づかされていくのでしょう。

(8月 3日)「サムエル記上 10 : 9～16」

そこにいた一人がそれを受けて言った。「この人たちの父は一体誰だろう。」
こうしてそれは、「サウルもまた預言者の仲間か」ということわざになった。

(サムエル記上 10 章 12 節)

・旧約聖書には、「預言状態になった」預言者たちが出てきます。これはいわゆる恍惚状態で、他人から見ると少し奇異に映ります。どうしてサウルは、このような状態にされたのでしょうか。

・サウルはこれから、預言者として歩むわけではありません。王になるにあたり、神の霊がサウルにも激しく降るのだということを本人にも周りの人々にも示す、という目的があったのでしょうか。

・ただサウルがおじに出会ったとき、サウルはおじにサムエルに出会ったこととろばの話はしましたが、王位のことには一切触れませんでした。自分がそのような者になることを、まだ受け入れ切れてなかったのかもしれませんが。

(8月 28日)「サムエル記上 17 : 1～11」

このペリシテ人は続けて言った。「今日、わたしはイスラエルの戦列に挑戦する。相手を一人出せ。一騎打ちだ。」

(サムエル記上 17 章 10 節)

・イスラエルとペリシテ人との間には、争いが絶えませんでした。サウル王はすでに 13、14 章で、ペリシテ軍と戦っています。今回はお互いの軍が集結し、戦いに備えて陣を張ります。にらみ合いです。

・そのとき、ペリシテ軍から一人の戦士が進み出ました。ゴリアト（昔の聖書ではゴリアテ）です。彼の背丈は 6 アンマ半、1 アンマが約 45cm なので、2m92cm にもなります。誇張して書かれているとしても、かなり大きな体です。

・その大男が一騎打ちをしようと、イスラエルの兵士たちに呼びかけます。当然、負けることなどないと踏まえてのことでしょう。確かに 3m 近くもある巨人と戦うなんて、考えただけでもゾッとします。

(8月 29日)「サムエル記上 17 : 12～18」

さて、エッサイは息子ダビデに言った。「兄さんたちに、この炒り麦一エファと、このパン十個を届けなさい。陣営に急いで行って兄さんたちに渡しなさい。」

(サムエル記上 17 章 17 節)

・昨日登場したペリシテの戦士ゴリアトは、40 日の間、朝な夕なやってきてはイスラエルの兵士に一騎打ちを挑みます。しかしその期間、イスラエルの兵士は誰一人、相手になると名乗り出ようとはしませんでした。

・その兵士の中に、エッサイの年長の三人の息子が含まれていました。戦いの様子はエッサイの元にはあまり伝わっていなかったのでしょうか。エッサイは八番目の息子であるダビデを使いに出します。

・16 章でサムエルに油を注がれたことについては、ここではまったく触れていません。その油注ぎは、非公式なものだったからです。ダビデはゴリアトがいる戦場へ、向かうことになりました。

(8月 26日)「サムエル記上 16 : 6～13」

しかし、主はサムエルに言われた。「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」
(サムエル記上 16 章 7 節)

・「牧師にふさわしい人」、そう言われると、どのような人を思い浮かべるでしょうか。背が高く、いつもニコニコ、弁がたち、オーラがあり、リーダーシップがあり…。数え上げるとキリがありません。

・エッサイの息子エリアブが連れて来られたとき、サムエルはこの人こそ王にふさわしいと思いました。しかし神さまの思いは違ったのです。7 人の息子はいずれも神さまの目には適わず、あとは羊の番をしているダビデだけでした。

・なぜエッサイは、ダビデを最初から呼んでいなかったのでしょうか。まだ若く、会食の席にはふさわしくないと考えたのかもしれませんが。しかし神さまの思いは、わたしたち人間の思いをはるかに超えるのです。サムエルはダビデに、油を注ぎました。

(8月 27日)「サムエル記上 16 : 14～23」

神の霊がサウルを襲うたびに、ダビデが傍らで堅琴を奏でると、サウルは心が安まって気分が良くなり、悪霊は彼を離れた。(サムエル記上 16 章 23 節)

・ここで聖書は、サウルとダビデとの最初の出会いを描きます。このときサウル王は、ダビデがサムエルによって「油注がれた者」となったことは知らなかったのでしょうか。サウルの家臣が勧めるままに、ダビデと出会います。

・サウル王は主の霊が離れたこともあり、悪霊に苦しめられていました。そこで家臣は、「堅琴を上手に奏でる者」を捜すことを提案します。羊飼いであるダビデは、堅琴の名手であり勇敢な戦士でした。

・そこでダビデはサウルが苦しめられるたびに堅琴を奏で、その心を安心させます。サウルはダビデを気に入りました。ところでサウルを苦しめていた悪霊は主から来たものであり、最後には「神の霊」と書かれています。神さまの怒りがサウルを襲っていたのです。

(8月 4日)「サムエル記上 10 : 17～27」

そこでベニヤミン族を氏族ごとと呼び寄せた。マトリの氏族がくじで選出され、次にキシユの息子サウルがくじで選出された。人々は彼を捜したが、見つからなかった。
(サムエル記上 10 章 21 節)

・10 章 1 節で、サムエルはサウルにすでに油を注いでいました。そのときに「王として聖別」していたはずなのに、なぜまたくじ引きをしたのでしょうか。もしかじが違う人に当たったらどうしたのでしょうか。

・それは心配ありません。というのもこの時代、くじは神さまのみ心が示されるものだったからです。単なる「偶然」を求めるものではありませんでした。「どれにしようかな、神さまの言うとおりに」なのです。

・くじは神さまのみ心どおり、サウルに当たります。これでイスラエルの民の前で、みんなが認めた王が誕生したのです。しかしサウルはその場におらず、隠れていました。重圧から逃れたかったのでしょうか。

(8月 5日)「サムエル記上 11 : 1～10」

使者はサウルのいるギブアに来て、事の次第を民に報告した。民のだれもが声をあげて泣いた。
(サムエル記上 11 章 4 節)

・サウルは王になりました。しかし油注ぎをされ、民から「王様万歳」という声をもらったものの、まだ実績は何もありません。さらにベニヤミン族という小さな部族出身でもあったことから、ならず者はサウルを嘲っていました。

・そのような中で、アンモン人のナハシュがギレヤドのヤベシュを包囲します。ヤベシュはナハシュに対して契約を持ち掛けますが、ナハシュは非常に侮辱的な行為を条件として提示します。それを聞いたヤベシュの長老たちは、イスラエルに救いを求めます。

・その報告を聞いたサウルに、神の霊が激しく降ります。彼は怒りに燃えて牛を切り裂き、それを送ることによってイスラエルとユダを団結させます。側女が 12 の部分に切り離され、イスラエルの全土に送られた出来事（士師 19 : 27～30）が思い起こされます。

(8月 6日)「サムエル記上 11 : 11~15」

しかし、サウルは言った。「今日は、だれも殺してはならない。今日、主がイスラエルにおいて救いの業を行われたのだから。」

(サムエル記上 11 章 13 節)

・サウルはイスラエルとユダを率い、アンモン人の陣営を打ち破ります。アンモン人は「二人一緒に生き残った者はいない」ほどの打撃を受け、ちりぢりになってしまいました。圧倒的勝利です。

・これがサウル王として、初めておこなった戦いだったようです。そこで強さを得たサウルでしたが、「主がイスラエルにおいて救いの業を行われたのだから」と謙遜な姿勢を見せました。

・そして嘲っていた人たちを殺すように言う民に対し、「今日は、だれも殺してはならない」と告げるのです。サムエル記上の後半では、ダビデに対する「暴君サウル」という記述が多くなりますが、このときにはまだその片鱗は見られません。

(8月 7日)「サムエル記上 12 : 1~5」

彼らは答えた。「あなたは我々を抑えつけたことも、踏みにじったこともありませんでした。だれの手からも何一つ取り上げたりしませんでした。」

(サムエル記上 12 章 4 節)

・この 12 章で、サムエルはイスラエルの人々に対して告別の辞を語ります。すでに彼は年老い、髪も白くなっていました。サムエルはまず、自分はイスラエルの人々を押さえつけたり、踏みにじったりしていなかったかを問います。

・サムエルは、幼いころ仕えていた祭司エリの息子、ホフニとピネハスが犯した罪を覚えていたのかもしれませんが、その二人とは違い、自分は神さまの前に正しく仕えてきたはずだと語るのです。

・そしてその語りに対して、主が証人となります。サムエルの正しさを、主が証明してくれるのです。合わせて、主が油を注がれた方も証人として用います。つまり新しい王であるサウルも、サムエルの正しさの証人とされるのです。

(8月 24日)「サムエル記上 15 : 24~35」

サムエルは彼に言い渡した。「今日、主はイスラエルの王国をあなたから取り上げ、あなたよりすぐれた隣人にお与えになる。」

(サムエル記上 15 章 28 節)

・サムエルはようやく、自分の罪に気づき、それを認めます。「わたしは、主の御命令とあなたの言葉に背いて罪を犯しました」。しかし続けて、こう言います。「兵士を恐れ、彼らの声に聞き従ってしまいました」。

・エデンの園で神さまから食べてはいけないと言われていた実を食べたアダムのせいにし、エバが蛇のせいにした物語を思い出します。サウルは王としてイスラエルのすべてのおこないに責任を持つべきでしたが、それができませんでした。

・神さまは、あなたをイスラエルの王位から退けられると、サムエルはサウルに伝えます。イスラエル初代の王、サウルはここで事実上失脚しました。ここから物語の主人公は、新しい王となっていきます。

(8月 25日)「サムエル記上 16 : 1~5」

サムエルは主が命じられたとおりにした。彼がベツレヘムに着くと、町の長老は不安げに出迎えて、尋ねた。「おいでくださったのは、平和なことのためでしょうか。」

(サムエル記上 16 章 4 節)

・15 章でサウル王は、主の命令に背きました。そのために主の霊はサウル王から離れ、またサムエルもサウルとはもう会わないと決めました。そして神さまは、サウルを王としたことを悔いられていました。

・その中で、主なる神さまはサムエルに語ります。その内容は、エッサイの子の中に王となるべき者を見出したというものです。エッサイは、ルツ記に出てきたボアズとルツの孫にあたる人物です。クリスマスの聖歌でも、「エッサイの根より」と歌われます。

・そこでサムエルはベツレヘムに向かいますが、町の長老は不安に襲われます。というのもサムエルの手には油を満した角があり、それは新たな王を聖別する道具だからです。政治的な緊張を、ベツレヘムの長老は感じたのです。

(8月 22日)「サムエル記上 15 : 10～16」

「わたしはサウルを王に立てたことを悔やむ。彼はわたしに背を向け、わたしの命令を果たさない。」サムエルは深く心を痛め、夜通し主に向かって叫んだ。
(サムエル記上 15 章 11 節)

・サウルが犯した過ちは、「滅ぼし尽くせ」と命じられたにもかかわらず、上等のものを取っておいたことです。サウルはそれを兵士のせいにし、また主への供え物にしようとしたと言いつけをしますが、サムエルの怒りは収まりません。

・サムエルはそこで羊の声や牛の声を聞きます。しかしサウルは主のみ声を聞くことができなかったのです。主はサウルを王に立てたことを悔やみ、そしてサムエルは深く心を痛め、夜通し主に向かって叫びました。

・サウルには神さまの悲しみやサウルの叫びさえも、聞こえなかったのでしょう。物事の重大さにまだ気づいていないように見えます。わたしたちにも誰かの熱い思いや祈りに気づかずに、自分勝手な行動を起こしてしまうことはないでしょうか。

(8月 23日)「サムエル記上 15 : 17～23」

サムエルは言った。「主が喜ばれるのは 焼き尽くす献げ物やいけにえであろうか。むしろ、主の御声に聞き従うことではないか。見よ、聞き従うことはいけにえにまさり 耳を傾けることは雄羊の脂肪にまさる。

(サムエル記上 15 章 22 節)

・サウルはサムエルの言葉を聞いても、神さまの怒りをなかなか受け入れることができなかったようです。「わたしは主の御声に聞き従いました。主の御命令どおりに出陣して、アマレクの王アガグを引いて来ましたが、アマレクも滅ぼし尽くしました」。

・このサウルの言葉が、すべてを物語っています。「自分はちゃんと神さまの言いつけを守りました」というサウルに対し、サムエルは「いけにえが大切なのではなく、み声に聞くことこそ大事だ」と説きます。

・わたしたちも形式的なことに目を奪われずに、心から神さまのみ声に聞く者になりたいと思います。礼拝や式文の祈りだけで満足することなく、神さまが何を伝えようとしているのかを祈り求める。それが大事なのです。

(8月 8日)「サムエル記上 12 : 6～17」

今、見よ、あなたたちが求め、選んだ王がここにいる。主はあなたたちに王をお与えになる。
(サムエル記上 12 章 13 節)

・サムエルは、主がこれまで何度もイスラエルを導いてきたことを伝えます。イスラエルの人たちを、主は「王として」導いてきました。ところが彼らは「人間の」王を求めたのです。それに応える形で、サウルが王として立てられました。

・その王が主の御声に聞き従い、主の命令に背かないならそれでいいのです。しかし王が背いてしまったら主の御手が下るのだと脅します。それが人間の王を立てるといことなのだと、サムエルは人々に語るのです。

・さらにサムエルは、「自分たちのために王を求めて主の御前に犯した悪の大きかったことを知り、悟りなさい」とまで言います。聖書にはこの後、ダビデやソロモンといった王が出てきますが、そもそも王を立てるといことは神さまの御心ではなかったようです。

(8月 9日)「サムエル記上 12 : 18～25」

主を畏れ、心を尽くし、まことをもって主に仕えなさい。主がいかに偉大なことをあなたたちに示されたかを悟りなさい。(サムエル記上 12 章 24 節)

・聖書の時代、小麦の刈り入れ時には雨がほとんど降らず、この季節に雨が降ったときは不吉だと言われていました。サムエルは昨日の箇所、イスラエルの人たちが自分たちの罪を悟るためにそのような時期に関わらず雷と雨が下されると言います。

・今日の箇所、サムエルが主に呼び求めると、主は雷と雨を下されました。サムエルが言った通り、「王を求める」といことは大きな悪だったのです。それならどうしてサウルを選んだのだろうと、不思議に思いますが。

・ただここからイスラエルは、「王国」として歩いていくことになります。過ぎてしまったことは仕方ありません。「今後は、それることなく主に付き従い、心を尽くして主に仕えなさい」と命じられます。過去も大事ですが、未来はもっと大事なのです。

(8月 10日)「サムエル記上 13 : 1～7」

イスラエルの人々は、自分たちが苦境に陥り、一人一人に危険が迫っているのを見て、洞窟、岩の裂け目、岩陰、穴蔵、井戸などに身を隠した。

(サムエル記上 13 章 6 節)

・ペリシテ人は、旧約聖書の中でイスラエルの敵としてよく出てきます。したがってイスラエルの王となったサウルは、その「敵」とどう対峙するのか問題になっていきます。サウルが王になって一年が経った時のことです。

・サウルにはヨナタンという息子がいましたが、彼はゲバという場所に配置されていたペリシテ人の守備隊を打ち破ってしまったようです。つまり簡単にいうと、イスラエルが「先に手を出した」ということです。

・ペリシテ人は、イスラエルに対して憎しみを覚えます。それは当たり前だと思います。彼らは戦いを仕掛けたわけではないのに、突然攻撃を受けたのですから。イスラエルの人たちはペリシテ人の怒りを買ったことを知り、おののきます。

(8月 11日)「サムエル記上 13 : 8～18」

サウルは、「焼き尽くす献げ物と和解の献げ物を持って来なさい」と命じて、焼き尽くす献げ物をささげた。

(サムエル記上 13 章 9 節)

・サウルは王として、イスラエルの人たちをまだ束ね切れていなかったのかもしれませんが。特に軍隊は、いわゆる義勇兵のような状態だったのでしょう。兵士たちはペリシテ人を恐れ、サウルから離れていきます。

・このようなときにイスラエルは、「主の力」に頼ってきました。今回もサウル王は、サムエルを呼びます。しかしサムエルは七日経ってもサウルのいるギルガルに来ませんでした。しびれを切らしたサウルは、「してはいけないこと」をしてしまいます。

・サウルには王として民を導く権威は与えられていました。しかし祭司としての働きは、サムエルにしか与えられていなかったのです。それなのに焼き尽くす献げ物を自分でささげてしまったサウル。そのおこないは、許されないことでした。

(8月 20日)「サムエル記上 14 : 47～52」

サウルの一生を通して、ペリシテ人との激戦が続いた。サウルは勇敢な男、戦士を見れば、皆召し抱えた。

(サムエル記上 14 章 52 節)

・昨日の場面で、ヨナタンの罪（サウルの誓いを破って蜂の蜜を食べてしまったこと）はお咎めなしになりました。ただサウルが誓った相手は神さまだったので、誰かが裁かれる可能性もあったはずです。

・しかしサウルもヨナタンも死ぬことなく、それどころか「向かうところどこでも勝利を収めた」そうです。この結果を見ると、ヨナタンを救った兵士の思いは神さまの目には良いものだったようです。

・サウル王は勇敢であったと聖書は書きます。このときはまだ、立派な王でした。これまでもところどころに、神さまをないがしろにするサウルの姿が書かれていました。そしてこれから先、彼の「悪行」が描かれることになるのです。

(8月 21日)「サムエル記上 15 : 1～9」

万軍の主はこう言われる。イスラエルがエジプトから上って来る道でアマレクが仕掛けて妨害した行為を、わたしは罰することにした。

(サムエル記上 15 章 2 節)

・サムエルはサウルに、主が語られたことを伝えます。それは、アマレクを討てというものです。出エジプト記 17 章 8～16 節に「アマレクとの戦い」という記載がありますが、その最後にはこのように書かれています。

・「彼らは主の御座に背いて手を上げた。主は代々アマレクと戦われる」。そこからカナンに入り、ヨシュア記、士師記と時代は流れます。しかし神さまは、「わたしは罰することにした」と決断されるのです。

・何とも、執念深い神さまです。サウルはその命令通りにアマレクを討ちますが、すべてを滅ぼし尽くさずに、アガク王を始め、羊や牛の最上のものなどを惜しみます。そしてその行為は、主の怒りを買うことになります。またまた怖い神さまです。

(8月 18日)「サムエル記上 14 : 36～37」

サウルは神に託宣を求めた。「ペリシテ軍を追って下るべきでしょうか。彼らをイスラエルの手に渡してくださるでしょうか。」しかし、この日、神はサウルに答えられなかった。

(サムエル記上 14 章 37 節)

- ・ペリシテ軍に大きな打撃を与えたイスラエル軍を率いるサウル王は、夜の間もペリシテ軍を追おうとします。そのときに祭司が進言します。「神の御前に出ましょう」と。神さまに託宣を求めるべきだということです。
- ・19 節にも祭司が出てきましたが、そのときは祭司との会話を途中でやめ、戦場に出て行っていました。つまりサウルはようやくこのときに、神さまのみ心を確かめようとしたわけです。
- ・ところが神さまはこのとき、サウルに答えられませんでした。戦いに行つて良いのかどうかもわからず、サウルは動揺します。そして気づくのです。誰かが神さまを怒らせたに違いないと。その結果は明日わかります。

(8月 19日)「サムエル記上 14 : 38～46」

サウルはヨナタンに言った。「何をしたのか、言いなさい。」ヨナタンは言った。「確かに、手に持った杖の先で蜜を少しばかり味わいました。わたしは死なねばなりません。」

(サムエル記上 14 章 43 節)

- ・旧約聖書の中で「くじ」は、偶然が支配する抽選道具ではありません。神さまのみ心が示されるものです。サウルは神さまが託宣に答えてくれないのをみて、きっと誰かが大きな罪を犯したに違いないと思います。
- ・その罪を犯した人物を知るために、サウルはくじを用います。最初のくじは、罪を犯したのはサウルかヨナタンか、あるいはそれ以外の兵士なのかを示します。なぜそのような分け方にしたのでしょ

(8月 12日)「サムエル記上 13 : 19～23」

それで、イスラエルの人が鋤や鍬や斧や鎌を研いでもらうためには、ペリシテ人のところへ下るほかなかった。(サムエル記上 13 章 20 節)

- ・13 章の最後には、ペリシテ軍とイスラエルの人々の状況が語られます。当時の戦いで用いられていた剣や槍は、ペリシテ人の鍛冶屋が一手に扱っていたようです。ヘブライ人というのは、イスラエルの人々のことです。
- ・つまり簡単に言うと、ペリシテ人とケンカをすれば剣や槍といった武器はもちろんのこと、鋤、鍬、斧、鎌といった農作業や日常生活に必要なものさえ使えなくなってしまうということです。ヨナタンはどうしてそんな相手に、戦いを挑んだのでしょうか。
- ・ただここで聖書が言いたいのは、ヨナタンの無鉄砲さではありません。それほどまでの苦境に陥った中で、イスラエルはどう戦っていったのかということです。そしてそこには、神さまの導きがあったということが大事。それが次の 14 章に書かれていきます。

(8月 13日)「サムエル記上 14 : 1～5」

ある日、サウルの息子ヨナタンは自分の武器を持つ従卒に言った。「さあ、渡って行き、向こう岸のペリシテ人の先陣を襲おう。」ヨナタンはこのことを父に話していなかった。(サムエル記上 14 章 1 節)

- ・ここで突然、物語はヨナタンを中心にして進んで行きます。ヨナタンはサウルの息子でした。彼は 600 人の兵士を率いており、そこにはアヒヤやイカボドといった兵士もいたようです。
- ・ヨナタンは自分の武器を持つ従卒に向かって言います。「さあ、向こう岸のペリシテ人の先陣を襲おう」と。戦いに勢いをつけるために先手を打とうというのです。ただし、ヨナタンと従卒は、兵士たちに気づかれないうちに出て行ったようです。
- ・ヨナタンはサウル王の息子ですから、王子ともいえる人物です。そのような人物が、従卒だけを連れて先陣を襲おうとしているのです。無謀といえ

(8月 14日)「サムエル記上 14 : 6～15」

もし、『登って来い』と言え、登って行くことにしよう。それは、主が彼らを我々の手に渡してくださるしるしだ。」

(サムエル記上 14 章 10 節)

- ・ヨナタンと従卒は、二人だけでペリシテ軍の先陣に向かいます。その背景には、主への大きな信頼がありました。「主が我々二人のために計らってくださるにちがいない。主が勝利を得られるために、兵の数の多少は問題ではない」。
- ・ヨナタンはペリシテ軍の先陣の兵士がどう対応するかによって、主のみ心を探ります。このあたりのやり取りは、今のわたしたちにはなかなか理解しがたいことです。しかしヨナタンは、このときに主のみ心を確信したのです。
- ・ヨナタンと従卒は、ペリシテ軍の兵士を 20 人ほど討ち取ります。その数はペリシテ軍の中ではほんのわずかかもしれませんが、彼らの中には恐怖が渦巻きます。敵が目に見えないからこそ、皆うろたえたのです。

(8月 15日)「サムエル記上 14 : 16～23」

サウルはアヒヤに命じた。「神の箱を運んで来なさい。」神の箱は当時、イスラエルの人々のもとにあった。

(サムエル記上 14 章 18 節)

- ・混乱するペリシテ軍の様子が、サウルの見張りに伝わります。サウルはなぜそのような状況になったのか、理解できなかったことでしょう。点呼を取ってみると、ヨナタンとその従卒がいませんでした。
- ・サウルは、「ヨナタンが何かしたに違いない」と気づいたと思います。それが具体的にどういうことなのかは分からなかったとしても、ペリシテ軍が混乱に陥っている状況が目の前にあるのです。このチャンスを逃す手はありません。
- ・サウルの兵士も出撃しますが、ペリシテ軍は混乱の中で同士討ちまで始めていました。誰が味方で誰が敵かさえ、分からなくなったのでしょう。こうしてヨナタンの策はうまくいきました。そしてその背後には、主のご計画があったのです。

(8月 16日)「サムエル記上 14 : 24～30」

兵士が森に入ると蜜が滴っていたが、それに手をつけ、口に運ぼうとする者は一人もなかった。兵士は誓いを恐れていた。(サムエル記上 14 章 26 節)

- ・十戒には、「誓ってはならない」という掟があります。しかし旧約聖書にはたびたび、神さまに誓う場面が出てきます。戦いの後、自分を最初に出迎えた者を主におさげすると誓って自分の娘をささげざるを得なかったエフタの例(士師記 11 章)もありました。
- ・サウルは、「日の落ちる前、わたしが敵に報復する前に、食べ物をお口にすることは呪われよ」と誓います。兵士が飢えている中で、なぜこのようなことを誓うのでしょうか。ただ、王の誓いです。人々は恐れながら、それを守ります。
- ・ヨナタンは、王である父サウルがそのようなことを誓ったということを知りませんでした。そのため、森にあった蜂蜜を何も考えずに食べてしまいます。その結果、ヨナタンの目は輝きました。ヨナタンにとって、父に誓いは的外れに思えたことでしょう。

(8月 17日)「サムエル記上 14 : 31～35」

兵士は戦利品に飛びかかり、羊、牛、子牛を捕らえて地面で屠り、血を含んだまま食べた。

(サムエル記上 14 章 32 節)

- ・この箇所が出来事が、日の落ちる前の出来事か、後の出来事かは書かれていません。ただ日の落ちる前であれば、サウル王の誓いはまだ生きていたはずですが。しかしそこに言及がないところを見ると、日は落ちていたのでしょうか。
- ・しかしここでは、もう一つの「良くないこと」が指摘されています。それは、「血をふくんだままで」肉を食べたということです。レビ記 3 章 17 節にはこうあります。「脂肪と血は決して食べてはならない」と。
- ・さらに「これはあなたたちがどこに住もうとも、代々にわたって守るべき不変の定めである」と定められているのに、兵士たちはむさぼり食べています。それほどまでに、お腹が空いていたのです。サウル王の誓いは、それほど兵士たちを苦しめていたのでしょうか。